

かねた ふみお
金田 文夫

自治労・書記長

今年こそ夢を叶えたい

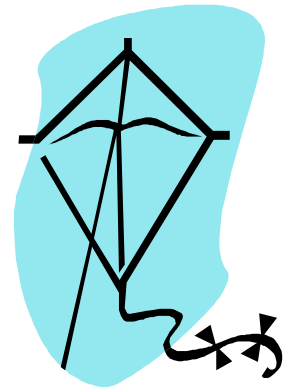
私は今年十月で六十歳を迎える。人生終盤にさしかかることになる。ふり返って私の人生の目標としての夢は叶えられたのか、年の初めに考えてみた。

まず私生活の面だ。若いころから大きな目標もなく、家族が普通に働きながら、健康で楽しく暮らしていければ、との思いだった。今もその気持ちは変わらない。自分は趣味の少ない方だと思うが、なんとか時間をつくってストレス解消もできている。ただ、家族はどう思ってるかわからないが、仕事の関係で家族一緒の時間があまり持てていない。ワークライフバランスを推進する立場では少し問題があると自覚している。そんな私生活だがまあそこそこに夢は叶えられているのかなあと思っている。

さて、仕事の面だ。私も団塊の世代に多い、いわゆる仕事人間なのかも知れない。途中から労働運動が仕事になったので少し複雑な心境である。ふり返ると、私は、学校を出てすぐ地元の役場に勤め、その年に労働運動に飛び込んだ。そして、ほぼ同時にかつての社会党に所属することになった。本業の役場での仕事は八年間で、庶務・戸籍・農林と三課で事務の仕事をしてきた。初めは「組合もやってるから少しサボってもいいだろう」と思った時もあったことは否めない。しかし、少し時が経つにつれ、組合運動をやるには、職場での信頼・信用が不可欠であると、遅ればせながら気づくことになる。その後は、「仕事も組合もまじめにやろう」をモットーに歩いて

きたつもりだ。九年目には単組の休職専従となり、その後北海道本部の離籍専従役員、そして六年前に中央本部役員となった。

私の運動の原点は、やはり単組運動にある。きっかけは、単組役員による現場研修活動だった。役員は自分の職場は解っていても、他の職場、特に事務職は現場をなかなか理解しきれない。そこで現場を体験することを試みた。私は、清掃（ごみ・し尿の収集、ごみ焼却工場）、福祉（保育園、障害児療育施設）、学校給食調理場、下水道処理施設、等の職場を数日ばかりで実体験も含めて研修することができた。そのことで、事務職は事務職としての苦労があり努力していることは当然だが、それぞれの現場の仕事のたいへんさを実感できた。現場では、少しでもサービス利用者に応えよう、満足してもらおうと知恵を出し合って頑張っていた。当時はまだまだ賃金労働条件にも大きな格差があった。職種・仕事によって多少の違いはあるとしても、たいへんな仕事に報われる待遇・労働環境であるべきだ。今で言うディーセントワークが大切であることを実感した。そして、そのことで求められるサービスにしっかり応える仕事につながっていくことはまちがいないと確信した。それは、役場の仕事と働き方だけでなく、公共サービスのエリアはもとより、民間における仕事と働き方にも通じるものだと思っている。ディーセントワークを尊重し合う社会を通して格差のない、安心・安全・信頼の社会につ



ながっていく、そのことを目指そうと当時から少しづつ考えてきたと思っている。そして、そんな社会を創るためにもうひとつ大切なのが、平和の追求である。これは学生のことからの思いでもあったし、労働運動の社会的役割としての重要な課題でもある。

一方、労働組合運動でいくら頑張っても国や自治体の制度、つまり法律や条例が整備されなければ実現しない事が圧倒的に多いことは言うまでもない。そんな思いで早くから旧社会党に籍を置き、地域活動や選挙活動にも加わってきた。反省点としては、労働運動の延長線上に政党活動をイメージし、労働組合の「政治局」的な一心同体の関係にとらえ、労働組合（旧総評・県評）と旧社会党の活動が渾然一体化していたと思われることである。私は党の指導的立場にはなかったが、労働運動の立場で、もっと早い時期からそのことを正すべきと正面から主張できなかったことは、今でもくいが残っている。忘れてはならないことだと思っている。そして、九十六年に第一期の民主党が発足する。その時から労働組合と政党との関係は、かつてのそれとは大きく変化し、それぞれが自立した本来あるべき関係になっていったと私は思っている。私も旧社会党員時代の反省を踏まえて、九十六年から民主党に所属しているが、年月を経て今日の連合と民主党（現在は第三期だと思うが）の良き関係、バランスのとれた関係に進化してきたんだと実感している。ただ、少し気が

かりなのは、労働組合側が応援団として力を入れれば入れるほど、自分達の思いどおりに政党（民主党）の政策をコントロールしようとする思いが強くなっていくことである。応援するからには当然だとの思いだろうし、私もそう思いたくなる場面もある。しかし、やはりかつての反省点を思いおこすと、相互に自立した、バランス感覚を大切にしたいと思う。互いに議論し合って一致点を拡大していくという姿勢を持って臨むべきだと思う。そういう関係が国民・選挙民からも共感が得られ、民主党への支持の拡大、結果として労働組合の目指す社会の実現に近づくこと確信する。

ところで、本題にもどろう。私の人生の目標としての夢のことである。それは、格差のない安心・安全・信頼、ディーセントワーク、平和、これらが体現される社会の実現である。言いかえると自由・公正・連帯の社会でもある。そして、それは現在の自公政権下では成し得ない、政権交代が不可欠である。かつて九十三年に政界再編による政権交代は経験したが、選挙という民意によるそれではなかった。結果として政権は安定しないまま幕を閉じ、自民党中心政権にもどってしまったのだと思う。任期を考えれば、遅くとも九月までには総選挙が行われる。何としてもそこで勝利し政権交代する。そのことを通して、私の人生の目標としての夢を叶えたい。人生の節目となる今年こそ夢を叶えたい。今回が最後のチャンスなのかも知れない。